

エッセイ

やじ馬昆虫撮影記

(その4 模様を背負った甲虫たち)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

これまで、いろいろな昆虫に憧れて撮影してきた私であるが、写真を公開するとなると、どうしても「美しい色彩」とか、「きらきら輝く翅」という題材を紹介しがちである。でも歩いていて見つけた昆虫は、たとえどんな種でも撮影しようと心がけている。隠蔽擬態というすばらしい護身術を有している昆虫たちもいる。写真にしても目立たないものが多いが、その形や配色、そして見事な周辺環境への溶け込み等惚れ惚れするものも多い。ところがいざ紹介するとなると、周囲と区別がつきにくい昆虫はどこにいるのかわかりにくいことから、印象に残らない。特に白黒写真だとなおさらである。ということで、どうしても紹介する昆虫は派手な色彩や形態を持つ種類が多くなってしまう…。

しかし色がきれいとか、光沢を持つ以外にもインパクトのある昆虫は多い。それは特徴的な模様を有する昆虫である。模様が目を引く昆虫というのはチョウやガ等が多いが、もちろん他のグループにもいる。そして以前から私が一度は見たいと思っていたのが、オオトラフコガネ (オオトラフハナムグリ) である。

この虫は子供のころ持っていたポケット図鑑にも載っていたが、その扱いが小さいこともあって、全く印象に残っていなかった。美しい生態写真を見て、これは見たいと思ったのは、比較的最近であるが、どこに行けばこの虫に会えるのか、さっぱりわからなかった。ところがある会合で、この虫に会いたいと希望を述べたところ、偶然にも観察したことのある人がいて場所を教えてください、出会いへの道が開けた。それ以来、見たい昆虫については、所構わずその希望を声に出すことにしている (笑)。

さて、今回教えていただいた場所は、高尾山に近い林道であったが、写真撮影しながらのんびり歩いていたと

ころで、いきなり見つかった。その美しい姿にしばらく見とれていたところ、彼は身の危険を感じたのだろう、あたふたと動き出し飛び立ってしまった。これでは撮影にならないということで、また探し回ったところ、ようやく葉上で静かにしている個体を見つけ、撮影することができた (図-1)。やはり撮影前にしばし見とれてしまう昆虫だった。こうして感動する出会いをさせてもらったが、このときにはメスに会えなかったのも、またいつか今度はメスも撮影したいものである。

オオトラフコガネのような幾何学模様も美しいが、単純なドット模様にも奥の深さを感じることがある。調査で訪れた北海道でのことであった。たくさん植えられていたハーブに青黒っぽい実のようなものが点々とついている。なんだろうと思って近づくと、それは甲虫だった。ヨモギハムシと似た外観だが、よく見ると光沢の中にドット模様があつたのである！ハッカハムシというのがその名前であった。テントウムシのような明確なドット模様も美しいものだが、翅の色と同系統の渋いドット模様で、この虫のセンスのよさを感じてしまった (図-2)。でも管理しているガーデナーの話では、たくさん発生するので害虫扱いとなっていた。初めて出会ったばかりの昆虫が、この場所では害虫化しているというのも驚きの話である。今後ハーブ類での発生がどうなっていくのか気になるところである。

さて「大型のハムシで翅に模様がある種」といえば、海外ではジャガイモの大害虫となっているコロラドハムシが挙げられる。幸い日本には入ってきていないものの、心のどこかであのド派手なストライプを撮影したいと思っている自分がある。その夢を叶えるべく？アメリカに旅立った私である。



図-1 オオトラフコガネ



図-2 ハッカハムシ

NEWS

危害防止運動の啓発ポスターを作成

プリグロックス L、ランネットの普及協議会

農林水産省などが6月から8月まで実施している農薬危害防止運動に賛同して、プリグロックス L 安全対策協議会とランネット普及会が推進ポスターを作成し、農薬安全使用の啓発活動を展開している。プリグロックス L 安全対策協議会は、事務局のシンジェンタ ジャパンと OAT アグリオ。ランネット普及会は、デュポンを事務局に、クミアイ化学工業、日本農薬、北興化学工業、丸和バイオケミカル、三井化学アグロの6社。



▲ プリグロックス L 安全対策協議会のポスターは、「きちんと。ただしく。」をキャッチコピーに浴衣姿の女性がモデル。ランネット普及会ポスター（左）のキャッチコピーは「ルーティンを守る。その大切さを知っている。」で、ラグビー選手の五郎丸歩氏がモデル。

日本生物防除協議会（JBCA）が正式発足

5月31日、都内で第1回総会を開催

日本生物防除協議会（Japan BioControl Association）は5月31日、東京都千代田区の出光興産会議室で第1回総会を開催し、正式発足した。同協議会は、日本微生物防除剤協議会と日本バイオリジカルコントロール協議会が統合してできた新組織で、初代の代表幹事にはアリス タライフサイエンスの小林久哉社長を選任。正会員



JBCA 第1回総会、生物防除の技術開発及び普及・啓発を目的に新生スタート、前列は中央の小林代表幹事と4名のアドバイザー

はアリス タライフサイエンス、出光興産、エス・ディー・エス バイオテック、協友アグリ、信越化学工業、住友化学、セントラル硝子（五十音順）の7社で、これに賛助会員17社（予定）、個人会員約70名（同）を加えた組織で新生スタートした。

小林氏は、「海外では天敵や微生物農薬、フェロモンなどが堅実に伸びているが、我が国での市場規模はまだ小さい。関連メーカーが一堂に会して市場拡大に取り組む意味がここにある。新規会員の介入を行うとともに、天敵や微生物農薬、フェロモンなどの技術の標準化や啓発に向けた情報発信の強化を通じて、日本農業の現状に根ざした IPM の普及、推進を目的に積極的な活動を展開していきたい」と抱負を述べた。

第5回通常総会と会員親睦会を開催

日本植物防疫協会

一般社団法人日本植物防疫協会（上路雅子理事長）は6月10日、東京都荒川区東日暮里のホテルラングウッドで第5回総会を開催し、平成27年度事業報告・収支決算並びに平成28年度の事業計画・予算などを承認した。来賓を代表して、農林水産省消費・安全局の島田和彦植物防疫課長と農研機構中央農業総合研究センターの津田新哉病害研究領域長があいさつに立った。

冒頭、上路理事長は、受託試験への取り組み強化や短期暴露評価への対応にともなう助成事業、会員組織と情報発信機能の拡充などの視点から平成27年度の活動を総括。また平成28年度の活動については着実かつ堅実な事業運営を基本方針としつつ、農薬の施用法について恒常的な検討の枠組みを作り、省力的で効果的な施用技術の開発と普及を支援していくことや、マイナー作物の薬効試験や残留分析試験などの技術ノウハウの継承を目的とした研修会開催など、新たな重点課題を強調した。昨年度約250名の新規会員を得た会員拡充への取り組みや情報発信機能の充実にも引き続き取り組む。

なお、今回は役員改選期に当たり、近藤俊夫業務執行理事が退任。退任した近藤理事を除く全理事・監事が重任し、理事・監事は10名体制となった。総会後の理事会では、上路代表理事・理事長、藤田俊一業務執行理事（調査企画部長及び支援事業部長兼務）、内久根毅業務執行理事（総務部長、不動産事業部長及び資料館事業担当兼務）と、業務執行理事の選定とその分掌が決議された。

午後5時過ぎから開催した会員親睦会は、農林水産省消費・安全局農産安全管理課の古畑 徹農薬対策室長による乾杯の音頭で開会。和やかな歓談の後、正会員を代表し梶原敏宏氏の中締めで、午後7時過ぎに散会した。